
新たな病の怪奇

刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新たな病の怪奇

【Nコード】

N6130N

【作者名】

刹那

【あらすじ】

新しい病気が発見された。症状、発症条件は定まっていない未知の病原体‘キユアウィルス’。その‘キユアウィルス’に感染した少年少女を各視点から語る切ないオリジナルストーリー。

（白波さつき編）眼球を貪る真っ黒な悪魔 1（前書き）

この小説はフィクションです。

悲しい物語が苦手な方にはお勧めできません。

少年少女が壊れていく様を書いたものです。

「グロい、可哀想」などなどの事は承知してください。

七月十六日

密室の中、私は机の上の蛍光灯だけを頼りに勉強している。
夜の十二時半。まだ三時間しか勉強していない。

シャーペンを止める気などさらさら無い。

深夜過ぎになるとお母さんが寝るようにと言って来る。

その時間まで私はひたすら勉強する。

運動神経が悪い私にとって勉強が全て。

知識が全てなのだ。

だからこそ勉強する。

夜更かししても勉強する。

止まらないシャーペンのすぐ横にポツンと雫が落ち、ノートにちいさな丸い染みを作る。

ん？ あれ？ 汗なんてかいてないのにな。

不振に思った瞬間。

視界が大きく揺らいだ。

めまい？ いや、そんな簡単な物じゃない。

椅子に座っていてもそのまま転げ落ちそうな、それぐらい酷い物。
自然に息が荒くなる。

両目を瞑り、額に手をやる。

まだ……回ってる。めまいは解けてない。

落ち着くのを待つて見ることにした。

数分たつとめまいは失せ、元通りに戻っていた。

一体なんだったんだろ。

両目を擦る。

「あれ……。泣いてる」

左目だけから涙を流していた。

なんて不快な泣き方。

ああ……。さっき落ちた雫はこれか。

目が疲れてるのかも知れない。

今日は寝よう。

ノートを閉じ、蛍光灯を消す。

そのままベットに横になり、眠りに落ちた。

七月十七日

ぴぴぴぴぴ

枕元のアラームが鳴る。

もう六時。

アラームを止め、身を起こす。

「んんううう」

大きく伸びをしてから自室を出る。

階段をしつかり踏みしめながら降りる。

不意に視界が揺らいだ。

だめだ！

がむしゃらに壁に手をやる。

傾いた体を立て直す。

危なかった……。あのままだったら明らかに落ちてた。

昨日ほど酷くは無いがめまいである事に変わりは無い。

これから用心することしよう。

階段を下りきり、リビングに入る。

中にはお母さんがいて、テーブルには出来たてのハムエッグとト

ーストが一枚置かれている。

「おはよう」

「おはよう……昨日は寝るの早かったみたいね」

「うん。昨日は……」

ゆっくりめまいに気を配りながら椅子に座る。

不意にテレビに目をやる。

ニュース番組の最中らしい。

『最近、新しい病気が現れた模様です』

新しい病気？少し興味が沸いたのでこのニュースを少し見てみることにする。

『この病気が発見されたのは栃木県寺田見町。てらだみちょう 症状、発症条件は定まっておらず、ただ発見が遅ければ死に至るとというのが厚生労働省の検査結果です。この病気に向けての対策はただいま検討中との事です』

寺田見町？私が住んでるこの町。

また物騒なことが始まったみたいね。新しい病気ね……興味深いけど関わりたくはない。

『続いてのニュースです。昨日開催された全国陸上高校生大会の優勝高は澄江丘高校すみえおかです。長距離走決勝戦、トップを独走していた寺田見第一高校。のこり二百メートル付近で右足首を抑え転倒。これ以上走れ………』

私が通う学校の話しみたいだけど興味が無い。

ニュースから気をそらしトーストにかじり付く。

トーストは冷え切ってパサパサしていた。

「いっています」

一言残して私は家を出た。

向かう先はもちろん学校。

めまいを警戒しながらしっかりと歩く。

大通りに差し掛かったところで信号に捕まった。

横断歩道の一步手前で青になるのを待つ。

はやく青にならないかな……。

この温暖化上の炎天下に突っ立ってるのは流石に辛い。

すると見つめる赤のランプが当然二つに分かれる。

途端に平衡感覚を失い、視界が揺らぎ始める。

まためまい！！

すぐにそばにあったガードレールを掴む。

荒くなった息を整えながらめまいが解けるのを待つ。

信号が青に変わる頃には完璧に元に戻っていた。

昨日から一体なんなんだろう。

新しい病気ってこれの事？

まさか……ね。

信号が赤に変わる前に私は横断歩道を駆け抜けた。

その後、学校に行くまではめまいに襲われることは無かった。

これじゃあ勉強に集中できるかどうか……はあ。

私はそのまま教室には向かわず、生徒会室に向かう。

こんな時間に教室にいても誰もいない。こんな早い時間に来て

いる人といれば教師、それと……。

「失礼します」

「おお…白波^{しろなみ}か。おはよう」

「おはようございます」

目の前にいる生徒会長、成川^{なりかわ}達哉^{たつや}先輩ぐらい。

「白波は会計なんだからこんな早朝に来なくて良いんだぞ」

夏休みに行われる盆踊りの作業資料の確認から目を離し私のほうを向き微笑んだ。

その笑顔がとても心地良くて……。

「迷惑でしょうか……？」

「まさか……！ そんな訳ないだろ」

私は先輩の隣の席に着く。

私は周りから孤立している。

暗い性格と容貌のせいだというのは分かっている。

だけど変える気は無かった。

私が私で無くなるのが嫌だったから。

周りに合わせて自分を変えるなんて事はしたくなかった。

でも、先輩はそのままの私と接してくれた。

だから先輩というのは心地よかった。

「なにか手伝う事ってありますか？」

なにか役に立ちたいと思う意思が強まりつい言葉を発してしまっ
た。

恥ずかしい……。

「そうだなあ、それじゃあこの盆踊りの至急金額の再計算をして欲しい。間違いがあつたら教えてくれ」

「はい」

先輩の役に立てる。それがすごい達成感と実行感を与えてくれる。私の存在意義を教えてください。

先輩に用紙を受け取り、メモ帳を取り出し計算式を組み立てる。

シャーペンが式を紙に映し出していく。

不意に式がずれた気がした。

一行ずれた？ どうして……。

目を擦る。

あ……。また泣いてる。左目だけ……。

左目を擦った指先を見つめる。

なんで？ どうして？

「どうした？ 間違いでもあったか？」

私が動きを止めたからだろうか先輩が私を覗き込む様に聞いてきた。

「いえ……何も」

「？ 左目……充血してるぞ」

「そう……ですか」

泣いていたのだから当たり前だろう。

でもなんで泣いていたんだろう。

いつまでも悩んでいられない。すぐに作業に戻ろう。

シャーペンを掴み芯を紙につけた瞬間。

視界から色が失せた。

黒と灰色のみで彩られた寂しく、ありえない光景。

だが、それは一瞬で終わる。

それを引き継いだように激しいめまいに襲ってきた。

酷い。今までで一番激しいめまい。

ううう……ダメ！！ 耐えられない。

私は椅子から転げ落ちる。

体を強打するのが分かる。

でも体より、目の奥のほうが痛んだ。

ズキズキと何かが押し寄せるような痛みと、ギュウウと眼球が潰

されるような痛み。

先輩が私を呼んだような気がしたけど確かめる事もできぬまま……

暗い意識へと落ちていった。

（白波さつき編）眼球を貪る真っ黒な悪魔 1（後書き）

まだ続編があります。

興味が湧いたのであれば読んで欲しいです。

（白波さつき編）眼球を貪る真っ黒な悪魔 2（前書き）

この小説はフィクションです。

悲しい物語が苦手な方にはお勧めできません。

少年少女が壊れていく様を書いたものです。

「グロい、可哀想」などなどの事は承知してください。

目を開ける。

真っ白い天井が映った。

私、今……どこで……。

顔を横にする。

真っ白いカーテンが目に入る。

その後、自分がベットに寝ていることに気付いた。

すぐに体を起こす。

ズキンと体中に痛みが走る。

私……生徒会室で……。

先輩……。

痛みを我慢しながら立ち上がり、カーテンをめくる。

保健室か……。

誰もいない……。授業に出て良いのかな？

でもこんな時間に教室に入ったらみんなの注目を集めることになる。

せめて休み時間になるまで……。

時計に目をやる。

今は二時限目。確か数学？のはず。

出席したいなあ……。

数分悩んだ後、決まった答えは、出席する、

めまいと足音に気を配りながら教室に向かう。

階段で三階を目指す。

パタパタと上履きが音をたてる。

極力小さくするように歩いているのだが静まり返った廊下には異常なほどに響く。

三階に着いた。

目の前の教室が私の所属するクラス。二年五組。

教室の引き戸に手をかける。

教室内から教師の声が聞こえる。

計算式の解の求め方を説明しているようだ。

その答えは13……。

教師の言葉から問題を理解しその答えを心の中で呟いてみせる。

ふう……と息を吐いた後に引き戸を開ける。

「つまり解は13となり……」と白波が、話なら成川から聞いている。席に着け」

「はい」

みんなの視線が集まっている。

吐き気がする……こっち向かないで。

そんな事思いながら一番後ろの窓側の席に着く。

机には私のカバンが置いてある。

先輩……ありがとうございます。

心で礼を言った後、カバンから教科書とノートを取り出す。

「言い直すぞ。AをXで割ることにより、解は13となる」

やっぱり合ってた。

ちよつとした優越感に浸ってみる。

黒板に目を向ける。

文字が見えない。

かすれて見えるとかブレて見えるとかではなく、全く見えない。

深い深い緑の黒板しか映っていない。

周りの生徒がノートに書き込んでいるところを見ると明らかに黒

板に何か書かれている。

でも見えない。

必死に目を擦る。

今回は泣いていない。
もう一度、黒板を見る。
今度はしっかりと白い字が映っていた。
何なんだろう……。
大きく首を振った後、気を取り直し授業に集中した。

帰りに生徒会室に寄った。
今日は安静にしていた方が良く先輩に言われたので、素直に帰宅した。

珍しく疲れた。体力的ではなくこう……精神的に。
大して勉強もしていない。
やはりめまいのせいだろうか……。
落ち着かない。

ボーとリビングの椅子に腰を下ろしながらテレビを見る。
大して面白くないバラエティを終えたテレビはニュースに移行した。

『ニュースの時間です。本日未明、北海道釧路で大規模な震度6強の地震が起きました』

地震か……最近あまり無かったから安心してたけど……。

地震は忘れた頃にやってくる。

言葉の意味がよく理解できる。

ガチャ。

リビングの扉が開く。

扉の向こうからお母さんの姿が現れた。

「あら、今日は早いよね」

「うん、生徒会の仕事が無かったから」

体調が悪くなったことは親に内緒にしておこう。
変な心配はさせたくない。

この家に必要な存在になるためにも。

迷惑ばかりかけられない。

「じゃあ、今から勉強するんでしょう？」

「う、うん」

そっか……。勉強があつたんだ。私が勉強を忘れるなんて滅多に無いのに……。めまいの事を気にしすぎているから？

ここまで一年半、こんな事は起こらなかったのに、どうして急に……。

「なら今日も早く寝れるわね」

「うん、多分」

「夕飯の支度ができたら呼ぶわ」

「うん、お願い」

私はテレビを消し、リビングを後にした。

リビングの扉を閉めた瞬間。

また激しいめまいに襲われる。

私はその場に方膝つく。

両目を閉じ、呼吸を整える。

数秒経つとめまいは治まり、元に戻る。

もう……。何なんだ？

ゆっくり立ち上がり私は部屋に続く階段を踏みしめた。

七月十八日

目を覚ました私は机に突っ伏していた。

顔の下には教科書やノートが広げられたまま放置されている。

勉強しながら寝てしまった？

きっとそうだろう。

いつもならお母さんがベットに寝るように促してくる。

私がここに寝ていることから言いに来ていない事が分かる。

お母さんにしては珍しい。

昨日、どこかに出かけたのかもしれない。

私は目を擦りながら、リビングに向かった。

リビングには誰の姿もない。ただラップに包まれたハムエッグとメモ用紙がテーブルの上に置かれている。

私はメモ用紙を手に取る。

「少し出かけます明日の朝には帰ります。お金はタンスの上に置いてあるからそれで昼食と夕飯を食べて下さい」
やっぱり出かけてた。

明日の朝か……。

私はハムエッグを温めなおさず、食べる。

乾いているのでぱりぱりしていて、あまりおいしくない。

トゥルルルルルルル。

家の電話が鳴り出した。

私は小走りで近づき、受話器を取る。

「もしもし」

『朝早くすいません。成川と申します』

「先輩!？」

まさかの電話相手にビックリして大声を張り上げてしまった。

『お、白波は元気を取り戻したみたいだな』

まさか……心配してくれて……。

「はい。おかげさまで」

『元気で何よりだ。心配してたんだぞ嬉しい……。』

「すいません」

『謝るなよ。今日は学校くるのか?』

「はい。行きます」

『そうか、ならいつも通り生徒会室で待ってる』

「はい」

ブツ

電話が切れる。

先輩が待つてくれてる。

自然に頬が緩む。

やる気もでたし、行こうかな。

私は上機嫌で振り返り、部屋に戻ろうとする。

「うつつっ！」

今度は右目に痛みが走った。

握りつぶされるような激痛。

痛みに体をよろめかせてしまった私は足をもつらせ、尻餅をつく。

それでも容赦なく、痛みは治まらない。

しばらくすると痛みも引き、元に戻る。

さっきの上機嫌はどツかにいつていた。

現実に取り戻された感じで心地悪い。

私は立ち上がり、よろめく足で部屋に向かった。

（白波さつき編）眼球を貪る真つ黒な悪魔 3（前書き）

この小説はフィクションです。

悲しい物語が苦手な方にはお勧めできません。

少年少女が壊れていく様を書いたものです。

「グロい、可哀想」などなどの事は承知してください。

奥の方で何か鼓動してる。

心臓とは別の何かが……鼓動してる。

目の奥で鼓動してる。

ザワ……。

何か蠢いた。小さな何かが……。

ザワザワザワザワザワ。

次々と動いていく。気持ち悪い。まるで虫が目の奥で……。

目の奥に虫？

いやいやいやああああ。

「どうした？白波」

パニックに陥る寸前、先輩の声で我を取り戻す。

「すごい汗かいてるぞ」

私は額に手を当ててみる。

……確かにベトベトに濡れてる。

何考えてるんだろう。先輩と二人っきりで居られる時間なのに。

「ホント……すいません」

先輩は急に立ち上がり、席に着く私の傍までやってくる。

そして私の前髪を左手で軽く上げて、右手で私の額に手の平を合わせる。

先輩の手の暖かさを感じる。

私はそれが心地よくて……。先輩がわからないくらいの微笑を浮かべて、暖かさを感じる。

暖かい……。

「熱は無いみたいだな」

そつと額から手の平が離れ始める。

「あつ」

「うん？」

離して欲しくなくてついつい声が出てしまった。

先輩は額に手をつけたまま私の顔を覗きこむ。

「どうした？」

「いえ、その……」

離さないでください、なんて口が裂けてもいえない。

だから俯いてしまう。

他の答えが無い。

純粹に離して欲しくないだけだから咄嗟に言い訳など出てくるわけがない。

「白波……。聞いて欲しい事がある」

先輩の真剣な声が聞こえる。

そつと視線を上げると目の前に真剣な眼差しをした先輩の顔があった。

「なんですか？」

「俺の……彼女になつて欲しい」

「……」

え？　なんて言ったの？

‘彼女になつて欲しい’ 幻聴まで聞こえ始めたのかな。

先輩がこんな私に告白してくるわけが無い。

だから聞き返すことにした。

「すみません。もう一度、言っ

」

私の口が塞がれた。

手じゃない。これは……。

先輩の唇……。

「ん……」

鼻から息が漏れる。

先輩が私を……。

そつと先輩の唇が私の唇から離れた。
先輩の唇の感触がまだ残っている。

「……」

「……」

長い沈黙。

次の言葉が見つからない。

先輩は私の答えを待っている。

今のキスは私が告白を聞き返したからした事だろうし、私が言わなきゃ話は進まない。

早くしないと副会長二人が来てしまう。

でも、答えが……見つからない。

先輩のことは私も好きだ。

薄々気付いていた。先輩と喋るときの楽しさと心地よさ、触れられたときの暖かさ。

ただ、認めようとしていなかっただけ。

私なんかに好きになられちゃ迷惑だと思って。

だからこのままが良いと思っていた。

それを先輩から打ち破ってくれた。

私はそつちに踏み込んでも良いのだろうか。

無駄なだけの存在じゃない。

そつちの世界での支えはそれになる。

存在意義を探し出すという、こつちの世界の支えからは全く異なるもの。

そつちの世界に踏み込んでも、私の存在意義は見つからないんじゃないだろうか。

無駄、じゃないだけで。

頭の中がクルクル回る。

考えがまとまらない。

瞬間。

眼球が切られたような激痛に襲われた。

握り潰すのではなく、切り裂かれたような鋭い痛み。

私は椅子から床に倒れこんだ。

「白波！！！」

先輩が叫んでる。

そっと抱き上げられるのを感じる。

確かめたいけれど痛みで声は出ないし、なにより……

目が開かなかった。

体が揺れている。

先輩が私を抱きかかえて保健室に走っているのだろう。

痛みは治まらない。

痛くて痛くてたまらなくて、口からうめき声が出るほど痛いのに。

頭だけは冷静に動いてる。

でも、ある意味拷問だ。

こんな痛みまま続くのならいつそ気絶してしまったほうが楽なの。

「はぁ……はぁ……はぁ」

先輩の息切れが聞こえる。

「はぁ……大丈夫か？ もう少しの辛抱だからな」

「あううう……あ、うううううう」

言葉が発せれない。

「かりつか 仮塚先生！」

先輩は走るのを止め、大声で叫んでいる。

保険の先生の名前を呼ぶって事は今いる場所は保健室前？

そっか。私を抱いてるから両手塞がってるんだ。

「どうしたの？ ってまた！！？」

ドアが開く音と共に先生の声が聞こえる。

「お願いします。前よりも酷いみたいです」

「いそいでベットに！」

「はい」

また体が揺れる。

数回揺れると先輩の暖かさからベットの温かさに変わる。

きつと離れていくだろう先輩の手を私は手探りで探し出して掴んだ。

「どうした？白波」

ここにいて欲しい。

言葉が出ない私にできる唯一の伝え方だった。

手が握り返される。

その暖かさを感じながら、私は闇に堕ちた。

あれから何時間経っただろうか……。

重い体をベットから起こす。

周りは白いカーテンに覆われている。

先輩はいなかった。

そりやそうだろう。授業に参加してるに違いない。

間違ってる。それが正解なのだから。

私のわがままのためだけに先輩が授業をすっぽかすはずが無い。

先輩は生徒会長なのだから。

立ち上がってカーテンを開ける。

誰もいないのかな？飯塚先生は……？

カーテンの壁から顔だけ出して先生の机を見ている。

そこには飯塚先生とは違う生徒が机に突っ伏して眠っている。

不振に思った私はそっと近づいてみる。

この髪型……。この体型。

もしかして。先輩？

横に向けてる顔を覗きこんでみる。

……………。

先輩だった。

とても穏やかな顔をしている。

いつも凜々しい顔してるけど寝てるときはとても可愛い。

私はこの顔をもう少し眺めていたかったので、近くにあった椅子を持ってきて先輩の顔が間近に見える位置に座る。

待っていてくれてありがとうございます。

窓から差し込む光は赤く、カラスの鳴き声が聞こえた。

時計は私が気絶してから10時間くらい経過した時刻を示していた。
た。

（白波さつき編）眼球を貪る真っ黒な悪魔 4（前書き）

この小説はフィクションです。

悲しい物語が苦手な方にはお勧めできません。
少年少女が壊れていく様を書いたものです。
「グロい、可哀想」などなどの事は承知してください。

「悪いな、ねてしまつて……。起こしてくれればよかったのに」
私は今、先輩と一緒に夜の歩道を歩いている。

「いえ、とても気持ちよさそうでしたので」

「うん……。たしかに寝心地はよかったがなあ」
二人で下校するのは初めてだ。

案外、家は近くにあつて登下校の道は私と大して変わらない。
先輩との接点を新しく見つけて、少し嬉しくなる。

「なあ、白波」

「なんですか？」

「そのお……だな。白波の事、下の名前で呼んで良いか？」
「え？」

下の名前？　つまり私の事をつかさつて呼ぶの？

自然に笑みが浮かんでしまう。

「嫌なら結構なんだが」

「ううん。私もそっちの方が良いです」

「良かった」

先輩は本当に私の事が好きなんだな。
早く、私も答えを返さなくちゃ……。

とか思っている内に私の家が見えてきた。

ここでお別れか……。

「私、ここが家なんで」

私は自分の家を指さす。

「ん、分かった。じゃあまたな」

「はい」

私から離れていく先輩に手を振った。

先輩は私が見えるところまでは手を振り返してくれていた。

「ただいま」

家に入る。

すると玄関にお母さんが仁王立ちで立ちはだかっていた。

「遅かったわね」

「……ごめんなさい」

また迷惑を、心配をかけてしまった。

「なにしてたの？ 生徒会の仕事にしては遅いわよね」

もう隠せ切れない。

「学校で寝てたの」

「寝てた！！！！？」

私の言葉が予想外だったのかは知らないが、お母さんは大声を張り上げて驚いた。

「体の調子が悪くて保健室で寝てたの。そしたらこんな時間に」

「まったく……あんたらしいったらあんたらしいけど」

「私らしい……。つまり前みたいに迷惑をかける私って事かしら。」

とても憂鬱になる。

とりあえず、ご飯食べて、お風呂入ってじっくり寝よう。

私は重い足取りで荷物を置きに行くため階段を上った。

七月十九日

今日は生憎の天気。

思いつきり雨が降っている。

この調子では、今日の体育は自習になるだろう。
これ以上のラッキーはない。

そんなことを思いながら、窓の外をみている私。
学校に行くにはまだ早すぎる。

だからボーとしている。

いつもなら勉強しているところだが、まためまいが始まったら困る。

そんなことを考慮している訳で。

そんな時に……。

ピンポン。

家のチャイムがなった。

誰かが家に来たみたいだ。

お母さんが出て行くだろうから、無視することにした。
だけど次のお母さんの一言で私は大きく飛び上がった。

「成川っていう生徒会長さんがいらっしやったわよ」

この言葉。

私は急いで階段を駆け下り、先輩のところに向かう。

なんで私の家に着たかは不明だけど、なにより嬉しい。

「おはようございます」

ぺこりとお辞儀。

「おはよう。はい、これ」

先輩は一本のシャーペンを差し出してきた。

とても見覚えのある……もしかして。

「私のですか？」

「ああ、昨日、生徒会室に置きっぱなしだったからな」

「いちいち家まで来なくても、学校で渡してくれれば」

「実はもう一つ、用件があつて」

「え？」

なんだろう。改まって。

「一緒に学校行かない？」

まさかの言葉。

一緒に学校に……。

先輩と一緒に学校……。

顔が熱い……。

「え、良いんですか？」

「そりゃ、もちろん」

嬉しい……！！

「ちよつとだけ待ってください」

私は急いで階段を駆け上がった。

部屋においてあるバックを掴んで、すぐに玄関に戻る。

「すいません。行きましようか」

「ああ」

「いつてきまーす」

ついつい嬉しくて大声で言ってしまった。

あんな声だしたのホント久しぶり。

私は傘を出して、雨の中に先輩と二人で入っていった。

「あの、先輩」

「なんだ」

雨が私の傘に打ちつける。

それはとても重くて、なにか悲しいものを感じる。

なにかが起きそうな、そんな悲しい。

「告白の話ですが、その……」

「……」

断りたくない。

それが正直な気持ち。

でもなんだろう。この罪悪感は。

とても深いなにかが、押し寄せてくる。

ザワザワと上のほうに。

「お断りさせていただきます」

「……そうか。返事ありがとう」

「いえ」

気付けば断っていた。

悲しそうな顔をした先輩を見て、私は開放感を感じた。

なんて、いやらしい女だろう……私は。

無言のまま、雨の中を私達は歩いた。

「どうしたの？ いつもイチャイチャしてるクセに」

副会長である**刈草巡先輩**が不思議そうに私と先輩を交互に見る。

いつも一定の時間が経つと、朝の生徒会活動に副会長も参加する。

そして朝からギクシャクしてる私達をみてまた一言。

「どうしたの？」

「なんでもないさ。気にするな」

先輩が答える。

「そ。ねえねえ、達哉。今日、一緒に最近開店したケーキ屋に行かない？」

刈草先輩が先輩にデート？の誘いをかけている。

先輩は私に一度、視線を送った後答えた。

「いや、また違う機会に頼む」

「そっか。ざーんねん」

刈草先輩は残念そうなため息を出した後、仕事に戻っていった。

その後の授業は上の空だった。

先輩に対する感情についてずっと考えていたから。

あの罪悪感は、あの開放感は、疑問に回答は出なかった。

だが、回答が出なかった代わりに激しい頭痛が私を襲う。
今までで一番酷い。

世界が崩れ去るような光景。
割れそうな痛み。

激しい頭痛の中、ふと気になったことがあった。

顔に体温とは違う温かさを感じた。

ゆっくり手で触れてみる。

濡れてる。

涙にしては又メリがある。

そっと手の平を見してみる。

手の平は真っ赤な血で染められていた。

その時、私は気付いた。

目から血を流している事を。

すると、また一段激しい痛みに襲われる。

そのまま、意識が保てなくなり、私は椅子から転げ落ちた。

クラスが騒ぐ声中、私は自分を失くした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6130n/>

新たな病の怪奇

2010年10月8日13時58分発行